校長室だより No.　33 平成 28 年 1 月 7 日(木)	強く　やさしく	六ツ美中部小学校校長 加　藤　嘉　一（かとう　よしかず）

「想像するちから」をはぐくむ　－新年を迎えて－

１月１日、霜は降りているもののそれほど寒さの厳しさはない朝、遠望峰山の方向から上る日の出を待つと、うす暗がりの静かさのなかで、すずめが群れをなして飛び立ったり、また止まり木に戻ったりする姿が見えました。かすかに泣き声が聞こえたかと思った瞬間、新幹線がいつもの勢いで走って行きます。初日の出を待つ自分とは別に、お正月も仕事をされている人がいることに気が付くと、ありがたみがわいてきました。少しずつ明らむ景色を見ながら、中部小学校の子供たちや御家庭は、穏やかなお正月を迎えているのだろうと思いを馳せました。

あけましておめでとうございます。本年も、どうぞよろしくお願いします。

１月１日の中日新聞・中日春秋に、松沢哲郎さんの著書『想像するちから』が紹介されていました。ヒトとチンパンジーのゲノム（全遺伝情報）の違いはわずか 1.2%ほどで、ほとんど同じ仲間であり、何に違いが生まれてきているのかという話です。「ヒト」の進化や「人」とは何かを考えることに通じます。ちょうど私も一年前にこの本を読み、松沢さんの講演を聞く機会を得ました。

この本で印象に残っていたことが、中日春秋で紹介されたものとほぼ同じでした。あるチンパンジーは、病気で首から下が麻痺し、床ずれをしてお尻の皮がむけ、骨まで見える状態にまでなりました。人間なら痛くて痛くて仕方ないし、身体が動かない状態から、この先の自分を案じ、悲観的になる場合がほとんどだと思われます。ところが、寝たきりのこのチンパンジーは、近くを通る看護士たちに、ピュッとつばを吐きつけるいたずらをし、彼らがびっくりする様子を見て何度も笑う姿が見られたのだそうです。何十年もの間チンパンジーを観察し、研究を続けた松沢さんが見ていても、けっして悲観している様子が見られない。看護と観察を続けた松沢さんは、これを見ながら人間との違いを次のように考えたそうです。

チンパンジーはただただ今を生きるから、明日のことを思い煩って絶望していない。ところが人間は将来を思い絶望する。「想像するちから」に違いがあると考えたのだそうです。その違いをもたらしたのは、ヒトを大きく進化させた「ことば」の発生のようです。

有名な実験を、この松沢さんたち（京都大学霊長類研究所）はしています。チンパンジーは、数字とその順序性を学習することができます。数字と順序性を学習させたチンパンジーに、ほんの一瞬９個の数字を、コンピューター画面のでたらめな位置に出します。消した後、どこに数が出ていたかを、小さい数字から順に思い出させ、指で触らせるものです。「記憶能力」を試す実験です。アイとアユムのふたりが有名ですが、特に子供のアユムは、９個の数字を約 0.7 秒で正確に記憶し、人間の大人ではだれにもできない能力を持っていたことがわかりました。

【京都大学霊長類研究所ＨＰ　チンパンジー・アイより引用】

【参照　「アイとアユム － 関連ホームページのリンク集 － 京都大学」で検索
http://langint.pri.kyoto-u.ac.jp/ai/ja/member-gallery/Ayumu-video-ja.html】

松沢さんの考えによると、ヒトは進化の過程で「ことば」を獲得しました。狩猟をするにも危険な動物から逃れるためにも、この「ことば」を発達させることで生活を豊かにしてきました。脳は、何かを獲得すれば、何かを失わなければならなかったようです。ですから、ヒトの祖先はもともとチンパンジーと同じように「記憶能力」があったと考えられますが、「ことば」を獲得した代わりに「記憶能力」を失ったと松沢さんは考えています。この「ことば」がもたらした最大のヒトの武器は「想像するちから」です。

松沢さんや中日春秋は、次のようなことを述べています。

「人間は将来を思い、容易に絶望する。しかし絶望する能力と同じ力、未来を想像する力があるからこそ、希望も持てる」「人間とは何か。それは想像するちから。希望を持てるのが人間」なのだと。

申年を迎えた新年にあたり、子供たちには、新たな夢と希望を持って取り組むことを期待します。そして、苦しいことがあったときや、つらいことがあるときにも、希望を持つ力をはぐくみたい。夢や希望を「想像するちから」を。

３学期は、２学期までの取り組みをもとに、学校・学年のしめくくりの学期として教育活動を展開します。（具体的なものは次号掲載予定）

どうぞ、よろしくお願いします。